

## 学生データを活用した大学適応型初年次教育の実践 —関西国際大学の事例を通して—

田中亜裕子<sup>1</sup>  
関西国際大学

### Practice of the First-Year Experience for Facilitating Adjustment Using Student Data: From the Case Study of Kansai University of International Studies

Ayuko TANAKA  
Kansai University of International Studies

#### 1. はじめに

本稿では大学適応型初年次教育を「高校教育と大学教育の学習環境の違いから生じる学習面、対人関係等の様々なギャップを小さくすることで、大学生活への適応の促進をねらいとしている初年次教育」と捉え、関西国際大学の事例を挙げて学生データを活用した初年次教育の実践を報告する。

はじめに本学における初年次教育の歩みを概観しながら、全学共通必修型初年次教育導入の経緯と現在の全学共通の初年次教育プログラムについて報告する。次に全学共通必修型初年次教育のみでは大学への適応が困難な学生への対応について学生データの分析を踏まえて報告する。そして本学が抱えている課題を整理し、現在検討している学位プログラム別の初年次教育の方向性について報告する。

#### 2. 必修型初年次教育導入の経緯と現在の初年次教育プログラム

表1に本学の初年次教育の歩みを示す。本学は、1998年の開学と同時に全国初の学習支援センター(2015年度より学修支援センターに改名)を設立し、アカデミックスキルが不十分な学生への支援を開始した。そして1999年に本学初の初年次教育プログラムとして「講義の攻略法」と「レポートの書き方」を開講した。この2つのショートプログラムは、同センターに寄せられた「どうしたらノートを取れるようになるのか?」「レポートの書き方がわからない」という学生の声を形にしたものであった。しかし、その利用者の多くは学習の課題に気づいた能動性の高い学生が中心であり、支援のターゲットとして想定していたアカデミックスキルが不十分な学生がセンターを利用することはまれであった。そこ

---

<sup>1</sup> 関西国際大学 atanaka@kuins.ac.jp

表1 本学の初年次教育の歩み

1998年	関西国際大学(経営学部)開学 学習支援センター開設
1999年	本学初の初年次教育プログラムとして「講義の攻略法」「レポートの書き方」を開講
2001年	全学基本教育科目として「学習技術」を開講 人間学部開設 ポートフォリオの導入
2002年	「学習技術」の教科書『知へのステップ』(くろしお出版)を刊行
2004年	「大学のユニバーサル化と学習支援の取組」特色 GP 採択 ウォーミングアップ学習(入学前教育)の開始
2006年	「初年次教育の総合化と学士課程教育への展開」特色 GP 採択 「KUIS 学修ベンチマーク」制定 eポートフォリオ・システムの開発に着手
2007年	eポートフォリオ・システムの本格運用を開始 学生メンター制度の導入
2008年	「初年次サービ斯拉ーニングの取組」教育 GP 採択 eポートフォリオ・システムのバージョンアップ 全学基本教育科目として「初年次サービ斯拉ーニング」を開講
2013年	全学基本教育科目として「初年次セミナー」を開講
2015年	「学期の主題」による科目統合化に着手(1年春:多様性理解, 1年秋:論理的思考)

出典: 田中亜裕子(2016)「大学不適應学生の個性に応じた支援策の検討」『教育総合研究叢書』9, 19-24

でこれらの学生に必要なプログラムを受講させるために、2001年に全学基本教育科目として「学習技術」を開講し、全学共通の必修型初年次教育を推進することとなった。これ以降開講された初年次教育科目についても必修型にすることで、すべての学生にもれなく必要なスキルを学ばせることが可能となった。

また、入学前教育として2004年にウォーミングアップ学習を開始し、2007年にはピアサポートとして学生メンター制度を導入している。その他、初年次教育に関連するものとして、2001年に学生の学習成果を統合するツールとしてポートフォリオを導入し、2007年にはeポートフォリオ・システムの本格運用を開始し現在に至っている。

そして現在、本学では入学前、入学時、春学期、秋学期の4つの時期に応じた内容の初年次教育プログラムを配置している(図1)。まず、入学前には不安の低減と大学への期待感の向上をねらいとして、入学前教育である「ウォーミングアップ学習」を実施している。ウォーミングアップ学習では、入学予定者は入学前の2月～3月にまる1日をかけて、在学が実施するコミュニケーションワークで緊張をほぐし、ゼミナール形式の授業などを経験する。入学時には仲間づくりと、学生生活に向けて必要な情報を提供することを目的として、4月第1週の1週間を使ってフレッシュマンウィークを実施している。このフレッシュマンウィークではピアサポートとして学生メンターが各クラスに入り、初対面の人間関係づくりのワークを実施したり、履修登録などをサポートしている。そして学生メンターは春学期中、1年生のクラス単位で行われる「初年次セミナー」に出席して、グループワークのサポートを行ったり、さまざまな大学生活にまつわる相談に応じている。

そして春学期の初年次教育科目では、ライティングの「学習技術」、キャリア教育と論理的思考力を養う「初年次セミナー」、人生について主体的に考え、生き抜いていくため

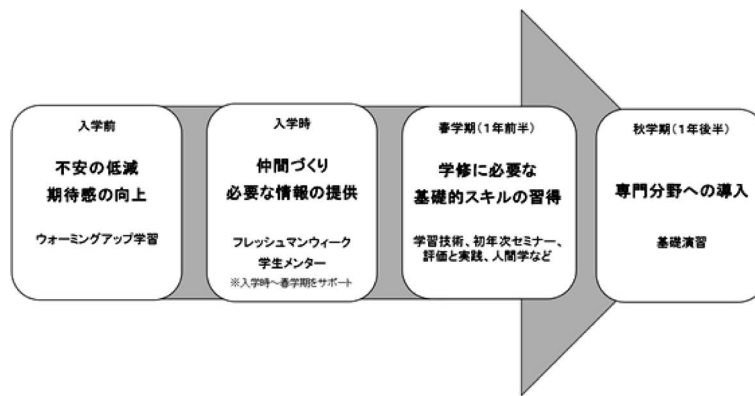


図1 初年次教育の流れ(2016年度)

出典：田中亜裕子(2016)「学生データを活用した大学適応型初年次教育の実践～関西国際大学の事例を通して～」『初年次教育学会第9回大会発表要旨集』

に必要な“考える手がかり”を提起する「人間学」、ふり返りの方法と機会を提供し、自己評価能力の育成を目的とした「評価と実践」などの科目を通して大学での学習に必要な基礎的スキルの獲得を目指している。秋学期にはクラス単位の「基礎演習」でキャリア教育の積み上げと専門分野への導入を行っている。

入学前～春学期にかけて初年次教育を集中的に行うことで、多くの学生が本学への適応を早い時期に果たし、秋学期には専門分野の学修へと円滑な移行を果たせるよう設計されている。

### 3. 学生の多様化への対応

高等教育進学がユニバーサル段階を迎えた現在、学生の多様化への対応は多くの大学にとって喫緊の課題であろう。本学においても進学目的が不明確なために学習意欲が低く、大学で学ぶために必要な学習習慣や学力を身につけずに入学した学生が年々増加傾向にある。

本学は開学当初から、全学必修の初年次教育と並行して、個別支援の取り組みにも力を入れてきた。保健室と学生相談室では1年生の保健調査票とUPI (University Personality Inventory) から得られた情報をもとに、健康状態の確認が必要な学生を把握し、4月末までに面談を実施している。そして学修支援センターでは授業開始後5回までの授業欠席回数を学生ごとに取りまとめ、欠席の多い学生についてはアドバイザーが個別面談を実施している。このように早期に個別対応をしてもリタイアする学生は増加傾向にあった。

そこで2013年度に2つの取組がスタートした。第一に、全1年生を対象とした個別面談の実施である。最も身近な教員となるアドバイザーとの関係を出来るだけ早く構築することをねらいとして、個別面談を入学直後の4月半ばまでに実施することとなった。新入生であれば誰もが感じる不安に焦点をあて、学生があらかじめ記入した面談準備シートに沿って10分～15分程度の面談を行った。第二に、基礎学力強化プログラムの開始である。入学前に実施した日本語運用能力テストで低得点の新入生を対象に学修支援センターが個別支援を始めた。こうして多角的な学生支援が可能となった。これらの取り組みが功を奏したのか、2013年度の1年生の中途退学率は減少した。

#### (1) 成績不振学生の特徴

2013年度の取り組みにより、中途退学率は減少しているが、このことは今までであれ

表2 累積 GPA 低群と中群の比較

		GPA1.5 以下 (N=70)		GPA 中群 (N=359)			t 値
		平均	SD	平均	SD	差	
q6_1	学習面でうまくいっている	2.15	0.75	2.68	0.71	-0.52	4.95***
q6_2	対人関係でうまくいっている	2.96	0.82	3.16	0.72	-0.20	1.85
q6_3	生活全般でうまくいっている	2.65	0.71	2.99	0.65	-0.34	3.25**
q7_1	学科・専攻の学びは、自分の興味・関心に合っている	2.79	.91	3.22	.73	-0.43	3.27**
q8_1	自分は必要とされている存在である	2.56	.64	2.77	.67	-0.22	2.17*
q8_2	自分は人の役に立つことができる	2.60	.72	2.85	.66	-0.26	2.43*
q8_3	物事の取りかかりが遅い	3.21	.70	2.96	.85	0.25	2.01*
q8_4	物事をてきぱきとこなせない	3.00	.77	2.68	.85	0.32	2.78*
q8_5	朝起きるのがとてもつらい	3.42	.67	2.93	.97	0.49	4.61***
q8_6	日中、眠くてしかたがないことが多い	3.19	.72	2.77	.90	0.42	3.23**
q9_2	課題の完成に十分な時間と労力をかける方だ	2.27	.74	2.55	.73	-0.28	2.55*
q9_3	学期末などの試験準備には十分な時間と労力をかける方だ	2.08	.59	2.48	.71	-0.41	4.51***
q10_1	授業時間以外に、授業課題や準備学習、復習をする	2.38	1.30	2.92	1.19	-0.53	2.97**
q11_1	正当な理由なく授業を欠席する	2.51	.775	1.87	.825	0.64	5.28***
q11_5	授業中に学生同士でグループワークをする	2.89	.640	3.21	.598	-0.33	3.65**
q11_6	授業課題のために図書館の資料を利用する	2.70	.696	3.08	.738	-0.38	3.50**
q11_7	授業課題のために web 上の情報を利用する	2.85	.864	3.22	.705	-0.37	3.43**
q11_8	授業時間以外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりする	2.58	.667	2.99	.765	-0.42	3.72***
q11_18	授業に集中して取り組む	2.75	.757	3.12	.680	-0.36	3.57***

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$

出典：田中亜裕子・板山昂 (2015)「関西国際大学における初年次教育の歩みと課題」『初年次教育学会第 8 回大会発表要旨集』

ば早期に退学していた学生の層が本学で学生生活を続けているということにほかならない。そこで、IR データを用いて成績が低迷している学生の特徴を明らかにすることで必要なサポートについて検討した。

表 2 は成績不振群 (GPA1.50 以下) と平均群の比較である。この結果から成績不振群は学習習慣、学習スキルが身につけていないと感じており、大学での学びに消極的であることがうかがえる。また自尊感情が低く、生活リズムに問題を抱えている割合が多い。これらのことから学習、心身、生活面からの多角的なサポートが必要であることが示唆された。

## (2) ターゲット層に対する積極的個別支援～成績不振学生 (2 年生) への支援

「成績不振学生の特徴」の分析を受けて、人間心理学科の教員と学修支援チューター (学修支援を行う学生) が学習面、生活面での個別支援を実施した。対象となった学生は、2014 年

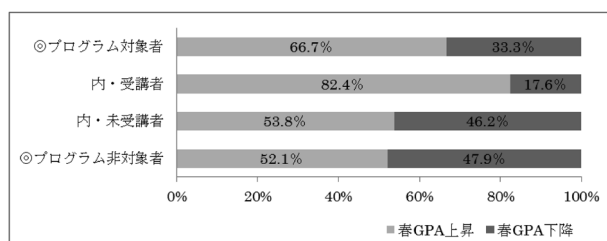


図2 2014年度生 GPA 変化(1年秋→2年春)

出典：田中重裕子(2016)「学生データを活用した大学適応型初年次教育の実践～関西国際大学の事例を通して～」『初年次教育学会第9回大会発表要旨集』

度生(実施当時2年生)のうち、累積 GPA, 1年秋 GPA のいずれかが1.7未満の学生であった。

実施内容はレポート対策プログラム(春秋いずれかが1.7以上で、生活リズムプログラム該当者は除外)と生活リズム改善プログラム(2015春7月時点で履修科目のうち3回以上欠席3科目以上該当)であった。対象学生に成績の詳細データと申込書をアドバイザーより手渡し、申し込みを勧めた。「レポート対策プログラム」については対象者の56.7%,「生活リズム改善プログラム」については対象者の23.5%から申し込みがあった。

図2はプログラム対象者のうち受講者と未受講者、非対象者の GPA 変化である。プログラム非対象者の成績上昇率が50%超であるのに比べ、プログラム受講者のうち82.4%の成績が上昇している。

なぜこのような成績の上昇がみられたのであろうか。1～2回のレポート指導で、アカデミックスキルや学力が伸びたとは考えにくい。むしろ課題への取り組みの姿勢に変化があったのではないかと考えることが妥当であろう。すなわち、教員や学修支援チューターによる個別の関わりが、レポートや試験への学修の動機づけを強めたのではないかと推測される。

#### 4. 学位プログラム別の初年次教育プログラムの検討

本学では2016年度に3つのポリシーの見直しを行い、学位プログラム(学科単位)ごとにポリシーを書き改めた。これに伴い、現在、学位プログラム別の初年次教育について検討を進めている。それぞれの学部学科に所属する学生の動機づけのレベルや目的、進路が異なれば、学部学科の特徴に応じた初年次教育の展開が必要となろう。本節では学部学科別に初年次生の特徴を IR データから導き出し、それぞれの特徴に応じた初年次教育のあり方について検討する。

##### (1) 初年次生の特徴

初年次教育について検討するために、各学科の1年生の特徴について分析を行った。

表3にその結果を示す。学部学科を超えた学生に共通する特徴は、体験型プログラムや専門領域への興味関心の高さと、睡眠や体調の問題を抱えた学生の多さである。一方、学部学科によって異なる特徴は、大学を選んだ理由、学習に対する自己評価、自尊感情、対人関係力であった。

各学部学科に所属する学生の共通点として、専門領域への興味関心が高いことを考慮すると、学部学科の専門領域のテーマを素材に初年次教育を展開することは、学生の学習意欲を高めることにつながるであろう。また睡眠や体調の問題が人間の脳機能や心身の健

表3 全学共通の特徴，学科により異なる特徴

<p><b>全学共通の特徴</b></p> <p><b>睡眠，体調の問題</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「朝起きるのがつらい，いつも疲れている」と感じている学生が半数以上いる</li> </ul> <p><b>教育システムへの関心</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習に関するシステムには関心が低い</li> <li>・インターンシップや実習，海外プログラムへの関心が高い</li> </ul>
<p><b>学科により異なる特徴</b></p> <p><b>大学を選んだ理由</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・経営学科はクラブ，他学科は専門領域の学びに魅力を感じている</li> </ul> <p><b>学習習慣，学習スキル</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎的な学習習慣や学修スキルが身につけていないと感じている学生の割合は学科により差がある</li> </ul> <p><b>自尊感情</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護学科に比べると，その他の学科は低い</li> </ul> <p><b>対人関係能力</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・看護学科を除き，他学科は「初対面の人と話すのが苦痛」「進んで話しかけることはしない」と答えた学生が半数以上いる</li> </ul>

康，行動面に影響を及ぼすことを考えると，初年次のうちに生活習慣や生活リズムを意識することの重要性について学び，その改善に役立つようなプログラムを提供することも検討が必要であろう。

そして学部学科による特徴の違いを考慮すると，共通の初年次教育プログラムを展開するには，学部学科によって需要度に違いがあること，またプログラムの提供時期についても学部学科毎に検討が必要であると考えられる。例えば，看護学科は国試に向けて多くの専門基礎知識を修得していく必要があることから初年次教育に割くことができる時間は限られている。基礎学力，対人関係能力が他学科に比べて高いことを考慮すると，大学での学びに必要なアカデミックスキルに絞って1年次春学期に集中して初年次教育の充実を図ることがよいかもかもしれない。一方，クラブ所属学生が多い経営学科は，1年春に集中しているプログラムを秋学期に分散させて，時間的余裕が生まれるような配慮が必要だと思われる。そして，その後の分析によると人間心理学科と英語教育学科は，対人関係やアイデンティティの問題を抱えている学生が多数存在することが分かっている。このような特徴を有する学科は1年秋学期についても引き続き，内面的アイデンティティを促進するようなプログラムを配置することが必要と思われる。

## 5. まとめ

ここまでの報告をまとめると，学生の多様化に対応するために適応型初年次教育に課せられた課題は2つあると考えられる。第一に全学共通の必修型初年次教育を各学部学科の教育目標を見据え，所属学生の特徴に合わせてカスタマイズすることである。そのためには初年次教育部門と学部学科の共同作業によるプログラム改善が必須である。第二に個別支援が必要な学生への対応である。効果的な個別支援を実現するためには，対象学生の情報を共有し，教職員が連携して学生をサポートする組織的な体制の確立が求められる。